

幼児の素材遊びの検討

—ダンボール遊びと布遊びを比較して—

高原 和子・瀧 信子・矢野 咲子・宮嶋 郁恵・本山 司

Examination of the play using the material for infants

—Comparison of play with the corrugated cardboard and the play with the cloth—

Kazuko TAKAHARA, Nobuko TAKI, Sakiko YANO, Ikue MIYAJIMA
and Tsukasa MOTOYAMA

幼児の素材遊びの検討

—ダンボール遊びと布遊びを比較して—

高原 和子・瀧 信子*・矢野 咲子*・宮嶋 郁恵**・本山 司***

Examination of the play using the material for infants
—Comparison of play with the corrugated cardboard and the play with the cloth—

Kazuko TAKAHARA, Nobuko TAKI, Sakiko YANO, Ikue MIYAJIMA
and Tsukasa MOTOYAMA

概要

幼児期の多様な動きの獲得は、幼児の自発的な運動遊びの十分な実施に拠るところが大きい。ただし、多様な動きを引き出すためには、十分配慮された環境設定が必要である。その配慮とは何か、我々は、身近な物を使った環境設定の工夫について検討してきた。先行研究において、「ダンボール」を使用した遊びの実践における動きの分析を試み、幼児の多様な動きの経験に繋がる有効な環境設定となり得ることが示唆された。そこで、本研究では、「布」を使用した遊びの実践を試み、基本的動作の出現についてダンボールを使用した遊びの場合と比較、検討した。その結果、ダンボール遊びでは、適応と操作それぞれの運動技能が出現していた。一方、布遊びでは適応の運動技能の出現は少なく、そのままの状態を利用する動作は出現しにくいことが窺えた。しかし、ダンボールに比べて布遊びでは、手で操作しながら「走る」動作が多く出現し、このことは、軽量で幼児でも扱いやすい布という素材の特徴と考えられた。

キーワード：幼児、基本的動作、多様な動き、環境設定、素材（ダンボール・布）遊び

はじめに

現代社会において、子どもを取り巻く環境は著しく変化し、生活様式も様変わりしてきた。その影響は子どもの体力・運動能力にも少なからず影響を及ぼしている。経年的な子どもの体力・運動能力の低下が問題視される中で、体力・運動能力が高い子どもと低い子どもの格差や、運動する子どもとそうでない子どもの二極化傾向^{1,2)}、さらには、自分のからだをイメージ通りに動かさない、操作できない子どもの増加なども課題としてあげられている³⁾。

そこで文部科学省をはじめ多方面から子どもの体力・運動能力面の改善をめざした取り組みがなされ、近年、ようやく小学生の体力・運動能力の低下傾向に歯止めがかかったとされていた。しかし、2019年12月にスポーツ庁より発表された「令和元年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査」によると、小学校5年生の体力合計点（各テスト項目得点の平均値）が平成20年の調査以降の推移のなかで再び低下し、小学生男子においては、過去最低の数値であることが報告された⁴⁾。その背景として

は、授業以外の運動時間の減少（1週間の運動時間が420分以上の割合が減少）、スクリーンタイムの増加（平日1日あたりのテレビ、スマートフォン、ゲーム機等による映像の視聴時間の増加）、肥満である児童の増加、朝食を食べない児童の増加が挙げられている。つまり、子どもを取り巻く環境がこのような背景を生み出していると考えられる。

幼児においても同じような状況が考えられる。すでに、幼児の経年的な体力・運動能力の低下が問題視され⁵⁾、体力・運動能力を生み出す動作様式（基本的動作）そのものの発達も未熟な段階にとどまっていることも報告されている⁶⁾。このように、子どもの体力・運動能力の低下や、多様な動きの獲得不足等は、すでに幼児期から始まっていることが分かり、幼児期からの対策の必要性が示唆されている。

また、文部科学省は、平成19年度から21年度にかけて「体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究」を実施している。その報告書によれば、からだを動かす機会の減少傾向を窺う結果がみられ、社会状況の変化は幼児においても同様の影

* 福岡こども短期大学

** 福岡女子短期大学

*** 東亜大学

響を与えており、それが結果的に幼児期からの多様な動きの獲得や体力・運動能力に影響していると示唆している⁷⁾。

このようなことから、子どもの体力・運動能力の改善は、幼児期からの対策が必要であることが明らかとなった。そこで、文部科学省では、先の調査結果を踏まえ、幼児期運動指針策定委員会による幼児期における運動の在り方についての指針策定作業が行われ、2012年に「幼児期運動指針」⁸⁾と、それを具体化した「幼児期運動指針ガイドブック」⁹⁾が取りまとめられた。

「幼児期運動指針」では、幼児期における運動の意義として、「幼児期において、遊びを中心とする身体活動を十分行うことは、多様な動きを身に付けるだけでなく、心肺機能や骨形成にも寄与するなど、生涯にわたって健康を維持したり、何事にも積極的に取り組む意欲を育んだりするなど、豊かな人生を送るための基盤づくりとなる」と述べられている。そして、その効果として、(1) 体力・運動能力の向上、(2) 健康的な体の育成、(3) 意欲的な心の育成、(4) 社会適応力の発達、(5) 認知的能力の発達、が期待され、幼児が遊ぶ中で遊びを創意工夫し、遊びを質的に変化させることで豊かな創造性を育むことにもつながるとされている⁸⁾。

さらに、「幼児期は、生涯にわたって必要な多くの運動の基となる多様な動きを幅広く獲得する非常に大切な時期である」とし、動きの獲得として「動きの多様化」と「動きの洗練化」の二つの方向性も示されている。特に「動きの多様化」においては、幼児期に獲得しておきたい基本的な動きとして「体のバランスをとる動き」、「体を移動する動き」、「用具などを操作する動き」を挙げ、「体を動かす遊びや生活経験などを通して（中略）、多様な動きを獲得していく」ことの重要性が示されている⁸⁾。よって、幼児期に多様な動きが十分経験できるような環境と、それを実施することのできる十分な時間を確保することがますます重要となってくる。特に、幼児の9割以上が幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園等の幼児教育・保育施設を利用する現代にあっては、施設における子どもの自由遊びの時間の確保と、保育者の十分な環境設定は必要不可欠な条件となる。

先般改訂（または改定）された平成29年告示の幼稚園教育要領¹⁰⁾、保育所保育指針¹¹⁾、幼保連携型認定こども園教育・保育要領¹²⁾では、社会情動的スキルや非認知的能力の獲得において幼児期の教育・保育が重要であることを示唆する近年の研究を受け、その内容の充実が図られている。特に環境を通じた教育・保育がその基本とすることが明記され、幼児自らが環境に関わり、自発的に活動し、様々な経験を積んでいくことができるように配慮すべきであるとされている。よって、幼児教育・保育施設等においては、幼児自らすすんで楽しくからだを動かす機会が持てるように十分な環境設定とその工夫が求められている。

我々は、幼児教育・保育施設における幼児の多様な動きの獲得を図ることをめざし、幼児の自由遊び時の環境設定の検討を目的として、身近にある素材を使用した実践研究を行っている。その第一弾として「ダンボール」を使用した遊びの実践における分析を試みた。その結果、幼児期に必要な基本的動作が十分出現することが確認され、幼児の多様な動きの経験に繋がる有効な環境設定となり得ることを確認することができた^{13, 14, 15)}。そこで、第二弾として「布」を使用した遊びの実践における動作等の調査を試み、その一報を報告した¹⁶⁾。

本研究では、幼児の自由遊びにおける環境設定の工夫の一助とするために、「布」を使用した遊びを実施し、「ダンボール」を使用した遊びの場合と基本的動作出現から比較し、素材の違いによる遊びの特徴を検証した。さらに、環境設定としての有用性を検討した。

方 法

これまで「板状のダンボール」や「布」を使った素材遊びを特に経験していない5歳児を対象に、ダンボール（板状）を使った遊びと布（木綿・オーガンジー・タオル）を使った遊びを実施した。研究方法については、先行研究と条件を統一した。詳細については以下のとおりである。

(1) 対象と実施日

対象は、福岡県春日市にあるK保育園の5歳児17名（男児9名、女児8名）である。実施は、それぞれの素材について実施日を変えて行った。ダンボール遊びは2017年12月13日、布遊びは2018年2月28日である。

(2) 環境設定と実施方法

開いた状態のダンボール（板状）と3種類の布（木綿・オーガンジー・タオル）を幼児の人数分用意した上で、研究者が園を訪問し実施した。ダンボールと布の種類および形状は図1のとおりである。

環境設定については、ダンボール遊びの場合は、開いた状態のダンボールをフローアに立てた状態で、幼児の目にとまるように配置した。布遊びの場合は、はじめに「布」の種類と特徴について説明し、どの種類の布を使っても、また途中で変えても構わないことを伝え、布の種類ごとに重ねて置いた。

それぞれの遊びの時間は30分間で、遊びの内容に関しては、幼児の自主性に任せた。ただし、事前に①30分間自由に素材（ダンボールまたは布）を使って遊ぶこと、②使用する素材（ダンボールまたは布）以外の物は使わず、切ったり破いたりしないことの2点を幼児らに話した。なお、保育者および研究者は、指導や援助、声かけなどは行わず、安全管理と危険回避のみ行った。環境設定および実施前の様子を写真1に示す。

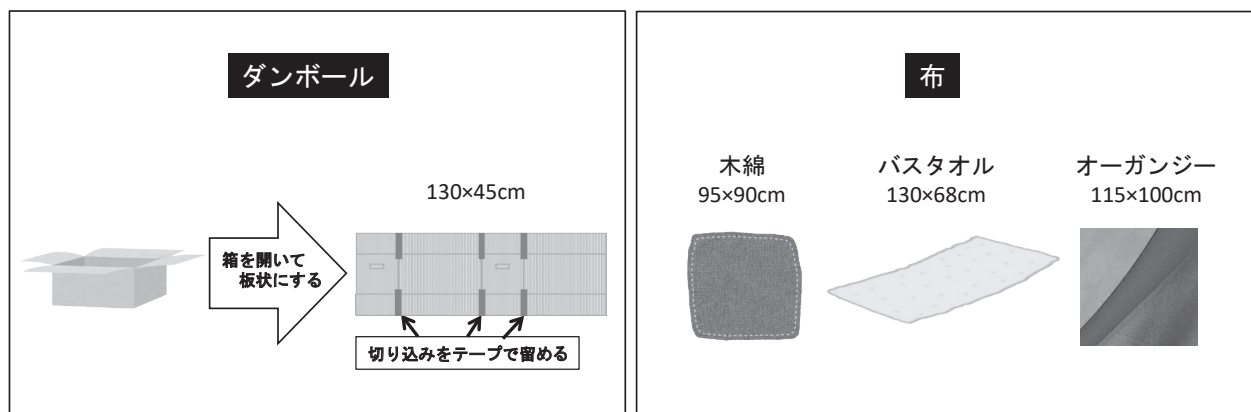


図1 素材の形状



写真1 素材遊びの環境設定と実施前説明の様子

(3) 観察方法

素材（ダンボールまたは布）を使用して遊ぶ幼児の様子を30分間ビデオに記録した。そのビデオ映像の中から幼児を個別に観察し、素材（ダンボールまたは布）遊びの中でみられた動作を記録した。動作のカウントは、ビデオ映像を基に、ある動作が出現した時点でビデオを停止し、その静止画像を保存するとともにその動作の内容を記録した。ただし、素材（ダンボールまたは布）を使わない遊びや、失敗などで動作が途中で終わったもの、完了されなかったものについては、データから除外した。

(4) 観察記録内容

予め記録表を作成し、動作の出現ごとに記録した。記録の内容は、動作出現時刻、遊び（動作）の具体的な内容やからだの状態（座位・立位、歩・走・ジャンプ、手足の状態等）、素材（ダンボールまたは布）の形状と位置、仲間との関わりである。また、動作の静止画像は、動作の分類・分析の際の確認に用いた。

(5) 動作の分類とその項目

動作は、石河ら¹⁷⁾、および体育科学センター¹⁸⁾が示す「基本的な動作とその分類」を参考にして先行研究で得られた「動作の分類」^{13,14)}に準じて分類した。

分類項目（カテゴリーと動作の内容）は、

- ① 安定性の「姿勢変化・平衡動作」
- ② 移動動作の「上下動作」, 「水平動作」, 「回避動作」
- ③ 操作動作の「荷重動作」, 「脱荷重動作」, 「捕捉動作」, 「攻撃的動作」
- ④ 複合動作の「操作動作と安定性」, 「操作動作（荷重動作）と移動動作（上下動作・水平動作）」

である。

なお、本研究の実施にあつては、事前に園の保育者と保護者に対し研究の趣旨を説明し、ビデオ撮影の承諾と同意を得て実施した。また、その際、本研究における収録映像は、研究のみに使用することも伝えた。

結 果

どちらの素材（ダンボールまたは布）遊びでも、幼児は思い思いに遊び込み、30分間遊びが途切れることはなかった（写真2）。ただし、遊びには素材の特徴があらわれた。カテゴリー別にみた遊びの特徴は次のとおりである。







(1) 安定性

安定性の「姿勢変化・平衡動作」とは、位置を変えずにその場で行う動作のことをいう。本研究では、素材



写真2 「ダンボール」および「布」遊びの様子

表1 「ダンボール」および「布」遊びにみられた安定性（姿勢変化・平衡動作）の動作

カテゴリー	動作の内容	ダンボール遊び			布遊び		
安定性	姿勢変化 平衡動作 位置を変えずにその場で行う動作	 四つ這いで 乗る	 からだを ねじる	 長座で 足にかける	 二枚に はさまれて 寝る	 床に敷いて 座る	 枕にして 寝る

(ダンボール・布)の上に乗る、立つ、座る、(うつ伏せ・仰向けで)寝る、布団のようにして間に挟まって寝る、掛ける等の動作が出現した。(表1)

ダンボールおよび布ともに、「座る・寝る・掛ける」動作がみられた。ただし、布においては、上に「立つ」動作はみられなかった。

(2) 移動動作

移動動作とは、からだの位置移動をともなう動作のことをいう。本研究における移動動作は、その方向によって次のような動きが出現した。(表2)

1) 「上下動作」

移動動作の「上下動作」は、上下に移動する動作をいう。本研究では、ダンボールの場合は、跳び越す、またぐ等の動作が出現したのに対し、布の場合は、その場で跳ぶだけにとどまった。

2) 「水平動作」

移動動作の「水平動作」は、水平に移動する動作をいう。本研究では、ダンボールの場合は、四つん這いで歩く、立てたダンボールの間を歩く・走る等の動作が出現した。布の場合は、走ってきて、あるいはそのまま上に乗って滑らせる等の動作が出現した。

3) 「回避動作」

移動動作の「回避動作」は、回避的に移動する動作をいう。本研究では、ダンボールの場合は、囲って入る、トンネルにして入る、くぐる等の動作が出現し、布の場合は、被る、羽織る等のからだを覆う動作が出現した。いずれも「隠れる」動作が多く出現したが、ダンボールの回避動作では、様々なダンボールの使い方での回避動作が見られたが、布遊びでの回避動作では、からだを覆う動作のみで、その他の布の使い方はみられなかった。

(3) 操作動作

操作動作とは、物や人を取り扱う(操作する)動作のことをいう。本研究における操作動作は、その取り扱い方によって次のような動きが出現した。(表3)

1) 「荷重動作」

操作動作の「荷重動作」は、(物や人)を持ち上げる動作をいう。本研究では、ダンボールの場合は、立てる、重ねる、持ち上げる、抱える、背負う、巻く、並べる等の動作が出現した。布の場合は、重ねる、持ち上げる、抱える、巻く等の動作が出現した。

2) 「脱荷重動作」

操作動作の「脱荷重動作」は、(物や人)をおろす動

表2 「ダンボール」および「布」遊びにみられた移動動作













カテゴリー	動作の内容	ダンボール遊び	布遊び
	上下動作 上下に移動する動作	 跳び越す  またぐ  跳び越える	 両手に持ちその場で跳ぶ
移動動作 からだの位置移動をとこなうもの	水平動作 水平に移動する動作	 四つん這いで歩く  迷路の中を歩く・走る  追いかけてっこ	 上に乗って滑らせる  走ってきて上に乗る滑る
	回避動作 回避的に移動する動作	 筒の中にしゃがむ  トンネルにして潜り込む  二つ折りにして入る	 頭からすっぽり被る  座って後ろから羽織る  全身を覆う

表3 「ダンボール」および「布」遊びにみられた操作動作

カテゴリー	動作の内容	ダンボール遊び	布遊び
	荷重動作 モノを持ち上げる動作	 頭上に掲げる  囲いをつくる  抱える	 頭に被る  背中に掛ける  端を持ち頭上にあげる
操作動作 ヒトやモノを取り扱う動作	脱荷重動作 モノをおろす動作	 重ねて下ろす  床に下ろす  抱えて下ろす	 広げて敷く  数枚を敷き詰める  重ねて敷く
	捕捉動作 モノを捕まえる動作	 折り畳む  床に重ねて置く  振り下ろす	 放り投げる  巻きつける  包む  グルグル回す
	攻撃的動作 ヒトやモノに強い力を加える動作	 振り回して攻撃する  蹴る  体当たりする	 大きく振りかぶって叩く  取り合って綱引きのようになる  寝て蹴り上げる

作をいう。本研究では、ダンボールの場合は、様々な位置から落とす、下ろす等の動作が出現し、布の場合は、敷く、敷き詰めるといった動作が出現した。

3) 「捕捉動作」

操作動作の「捕捉動作」は、(物や人をつかむ、握る、捕らえて扱う動作をいう。本研究では、ダンボール

の場合は、折りたたむ、バタバタさせる、振り下ろす、振り回す等の動作が出現した。布の場合は、振る、回す、巻きつける、包む、畳む、投げる等の動作が出現した。

4) 「攻撃的動作」

操作動作の「攻撃的動作」は、(物や人に強い力を加える動作をいう。本研究では、ダンボールの場合は、

表4 「ダンボール」および「布」遊びにみられた複合動作

カテゴリー	動作の内容	ダンボール遊び			布遊び			
	操作動作と安定性 位置を変えずにその場でモノを操作する動作							
	複合動作 安定性、移動動作、操作動作の動作が2つ以上複合しておこる動作	荷重動作と上下動作 モノを持ち上げながら上下に移動する動作						
	荷重動作と水平動作 モノを持ち上げながら水平に移動する動作							

蹴る・蹴り上げる、打つ・たたく、引っばる、押す・押しつぶす等の動作が出現した。布の場合は、蹴る・蹴り上げる、打つ・たたく、引っばる等の動作が出現した。

(4) 複合動作

複合動作とは、安定性、移動動作、操作動作それぞれの動作が2つ以上複合して起こる動作のことで、先行研究において確認された多くの遊び（動き）からカテゴリーとして位置づけた動作である。つまり、素材（ダンボール・布）を扱いつつからだの位置の変化や移動が組み合わされて発生する動作である。本研究における複合動作は、その動作の種類によって次のような動きが出現した。（表4）

1) 「操作動作と安定性」

複合動作の「操作動作（主に捕捉動作）と安定性」は、位置を変えずにその場で物を捉えて操作する動作を指す。本研究では、ダンボールの場合は、持って回転する・振り回す等の動作が出現した。布の場合も、持って回転する・振り回す等の動作が出現した。

2) 「荷重動作と移動動作（上下動作）」

複合動作の「荷重動作と移動動作（上下動作）」は、物を持ち上げながら、上下に移動する動作を指す。本研究では、ダンボールの場合は、垂らしてジャンプ、座り乗って跳ねる等の動作が出現した。布の場合は、からだに巻いてジャンプ、手で回しながらジャンプ、手で上下に振りながらジャンプ等の動作が出現した。

3) 「荷重動作と移動動作（水平動作）」

複合動作の「荷重動作と移動動作（水平動作）」は、物を持ち上げながら、水平に移動する動作を指す。本研究では、ダンボールの場合は、様々な荷重動作（からだ

の前につけて、からだに巻いて・囲って、脇に抱えて、筒にして、かぶって、抱えて、持ち上げて、頭に載せて、引いて）で歩く・走る等の動作が出現した。布の場合も、様々な荷重動作（からだに巻いて・かけて、被って、抱えて、持ち上げて、頭に載せて、引いて）で歩く・走る等の動作が出現した。

考 察

我々は、幼児の多様な動きを引き出すための工夫や手立ての一つとして、素材を用いた環境設定の有用性を検討している。その第一弾として素材の中からダンボールを選択し、ダンボールを使用した遊びの実践を試みた。その結果、ダンボールを使用した遊びは、幼児の多様な動きを引き出すことが確認され、遊びの中でみられた基本的動作の分析から有効な運動プログラムであることが示唆された^{13, 14, 15)}。そこで、先行研究で得られた成果をさらにすすめるために、素材を「布」に変え、遊びの実践を試み、その第一報を報告している¹⁶⁾。本研究では、その布遊びによる動作の出現をダンボール遊びの場合と比較し、幼児の多様な動きを引き出す環境設定としての有用性を素材の特徴から検討を試みた。

(1) 動作の出現からみた素材（ダンボール・布）遊びの特徴

本研究のダンボールを使用した遊びにおいては、先行研究で確認された「ダンボール」という素材の特徴が現れた動作が多く出現していることが確認できた。布遊びにおいては、それぞれの「布」（木綿・オーガンジー・タオル）の特徴を掴みながら、その特徴に応じた遊びを展開していた（表1, 2, 3, 4）。そのような素材の特徴

が表出したダンボール遊びと布遊びについて、出現した動作をカテゴリーに分けて概観する。

1) 適応の運動技能^{注1)} からみた特徴

適応の運動技能としての「安定性」の動作では、ダンボール・布ともに、「敷いてその上に座る・寝る」「からだに掛ける」という動きが多く出現した。ただし、ダンボールでは、床に敷いてその上に乗って立ち「からだをねじる」等の動作がみられたのに対し、布においては「布の上に立つ」という動作自体がほとんどみられず、一瞬立つが次の動作が続くため、安定性としての「布の上に立つ」動作としてのカウントはできないものであった。どちらの素材も床に敷くとその状態や様は同じである。したがって、形や見た目による影響は変わらないはずである。それに関わらず、布においてはその上に「立つ」という安定性の行動はみられなかった。このことは、幼児が「布」に対してある一定のイメージを持っていることが推察された。子どもの遊びやイメージは、生活体験に拠るところが大きい。日常生活の中で、「布」は、タオルや服、敷物や布団などで、身に付けたり、添わせたりする使い方をしている。その中で安定性の動作が生じ易いのは、敷物や布団であるが、これらの使い方としては「上に立つ」ではなく、(敷物に)座る、(布団に)寝るである。よって、実際の生活の中で体験している行動がそのまま遊びとして出現したので、布遊びでは安定性の「立つ」という動作が出現しなかったのではないかと考えられた。

ただし、素材の上に「乗る」状態としては、ダンボール・布ともに遊びの中で「上に乗って滑る」や「走ってきて乗り滑る」という「移動動作」の「水平動作」としては出現していた。このときのからだの状態は、座位、立位のどちらもみられた。本研究を含めこれまで行ってきた素材遊びでは、遊びの開始段階で、素材の様々な使い方を試す幼児の行動が観察されている。素材をいろいろな使い方とひととおり試し、その中で見つけた遊びを次々に展開していく。本研究でもダンボールや布を床に敷いて試す等の行動がみられた。敷いて扱っているうちに、素材が滑ることを発見し、そこからこの動作が出現した。特に、布においては、ダンボールと違い接地面が動きに合わせて柔らかく変化し、それに合わせて滑りが生まれる。そしてそれは立って行った方が滑りやすいのに気づき、故に「上に立って滑る」という水平動作が出現した。

また、「移動動作」において、ダンボール遊びでは「水平動作」として「歩く・走る」、上下動作として「またぐ・跳び越す・乗ってジャンプする」等の多様な種類の動作が出現した。しかし、布遊びにこれらの動きは出現しなかった。この点について考えられることは、ダンボールは立てたり、組み立てたりと素材の持つ可塑性から自立し、物体として存在できる。よって、それに適

応した複数の遊びが発生したためと考えられた。それに対し布では、その素材の特徴から、そのままの状態(操作しない、扱わない状態)で、物体として扱うという発想は生まれにくく、そのためダンボールのように多様な種類の移動動作が出現しなかったものと推察された。したがって、布遊びでは、ダンボール遊びに比べて「適応の運動技能」の安定性や移動動作として出現する種類は少なく、限定的であることが示唆された。

一方、「回避動作」はどちらもよく出現した。特にからだを覆って「隠れる」動作が多かった。このことは先行研究^{14, 15)}でも考察したとおり、子どもは狭い閉鎖的な空間を好む傾向にあり、非日常的な狭い空間でおこる安心感と、自分(あるいは仲間と)だけの空間に居る秘められた感覚のワクワク、ドキドキした感じを一緒に味わっているものと考えられた。ダンボールでは「囲って隠れる」「トンネルにしてくぐる」「二つ折りにして入る」など多彩な回避動作がみられたのに対し、布では「頭に被る」「背中から羽織る」「からだ全体をすっぽり覆う」など「からだを覆う」ことのみであった。また、ダンボールでは、はじめは一人ひとりがそれぞれで囲いを作り入ったり、隠れたりしていたが、そのうち仲間と一緒に複数のダンボールで囲いを作り「家・秘密基地」に変化していった。さらに、隠れることから発展して「かくれんぼ」等の鬼遊びがはじまり、やがて追いかけ遊びなどのダイナミックな動作へと発展していくケースもみられた。布では1枚分の大きさの制約もあってか1人で自分のからだを覆うのみで終わることが多く、仲間と一緒に隠れることは少なかった。加えて、比較的じっとして動かないことも多かった。

併せて、「回避動作」では、「にげる・かわす」動作も出現した。これは、ダンボールでは追いかけ遊びに発展したことから出現し、布では、多くは後述の仲間からの「攻撃的動作」を避けようとして出現した。

これらのことから、適応の運動技能において、出現する動作は、ダンボール・布ともに出現するものと出現しにくいものがあり、出現する動作にも両者同様のものもあれば、違うものもあることが分かった。そしてそれが素材のもつ特徴であることが示唆された。また、遊びは、幼児の生活経験に由来するものであり、それによって出現する動作も変わることが考えられた。

2) 操作の運動技能^{注2)} からみた特徴

どちらの素材も容易に扱うことができるため、操作動作はどちらの遊びでも多く出現した。特に、前述したように、遊びはじめの段階で幼児は、その素材の扱い方をいろいろと試すため、さまざまな操作の動作が出現した。このことはこれまでの先行研究でも確認されている¹⁵⁾。幼児は、このひととおりの「試し」動作の後、その中でみつけたおもしろい扱い方を手がかりに、次々に遊び込んでいった。

この初期段階で、ダンボールでは「抱えて置く」「床に立てる・敷く」といった動作が繰り返されるため、「荷重動作」「脱荷重動作」の出現が多かった。ここでもダンボールが物体として取り扱われている様子が窺えた。

ダンボール遊びでは、まず、ひとりで立てて中に入ったり、出たりを繰り返していたが、やがて、仲間と一緒に囲いを作り出し、それが発展して「家」ができあがっていった。そして、「家」からイメージされる遊びに没頭していった。そのうち、もっと「家」らしくみせるための工夫が生まれ、「屋根」が付き、「トンネル」状の構造物に形を進化させていった。また、中には密閉された空間を作り「秘密基地」を完成させていく者もいた。先に、適応の運動技能の「回避動作」が多く出現したことを述べたが、この「隠れる」ための構造物を盛んに作るため、ダンボールでは、荷重動作や脱荷重動作が多く出現した。さらに、工夫を加える中で、「折り曲げる・畳む・積む」等の動作が生じ、捕捉動作も増えていった。よって、これらの動作がダンボール遊びにおける操作の運動技能の特徴と考えられた。

布では「振る・回す・巻きつける・包む・畳む・投げる」等の「捕捉動作」が多く出現した。ダンボールにおいても出現していたが、扱いやすさにおいては布の方が勝っていた。

布遊びでは、まず「振る・振り回す」動作からはじまっていった。今回は3種類の布を用意したが、それぞれの扱い方を試すように、「振る・振り回す」を繰り返していた。そのうち、それぞれの一番扱いやすい布を使い、様々な遊びに移行していった。ある者は「床に敷いたり・広げたり」して、布団のように床に敷く（主にバスタオル）、「頭に被って」おぼけになったり、仮面を作ったりする（主にオーガンジー）、投げてキャッチしたり、振り回したりする（主に木綿やオーガンジー）等、思いつくものをどんどん実践していた。やがて、誰かがからだに巻いて遊び始めると、それに気づいた他の幼児も次から次からだにまとい始めた。そのため、からだに添わせた動作「被る・掛ける・巻く」等が多くなった。布は柔らかく柔軟であるため、からだに添わせ巻くことができる。また、端を結ぶことで留めることもできる。すると、布からイメージする衣服ができあがる。まさしく、これが布遊びの特徴の一つと考えられた。この特徴が活かされた遊びとして、男児では「マント」（主に木綿）に見立てて仲間と一緒にヒーローごっこに発展していき、女児ではからだに巻きつけて「スカート・ドレス」（主に木綿やオーガンジー）に見立ててお姫様に扮して遊ぶ姿が多くみられた。

また、攻撃的動作も多く出現していた。布遊びでは容易に「振る・回す・投げる」が可能のため、特に男児においては、このような動的動作が盛んに出現していた。はじめ、布を素早く振ったり投げたりしていたのが、ヒーローごっこと相俟って、振り回して攻撃するような

動作に変化していった。そして、やがて手に布を巻きつけて相手を攻撃したり、それを防御するために布で盾をつくって防いだりと、戦いごっこが主流となり、攻撃的動作が増えていった。ダンボールではみられなかった動作である。したがって、布遊びでは攻撃的動作を誘発しやすいことが窺えた。行き過ぎた「攻撃」は道義的に活動として不適切ではあるが、からだを十分使ったダイナミックな活動であり、身体活動としての観点からは、意味あるものと考えられる。

以上、ダンボール・布ともに、操作の運動技能としてはどちらも多彩な動きが出現することが確認された。さらに、その動きは、ダイナミックな動きを誘発することも示唆された。

3) 適応と操作の複合動作からみた特徴

複合動作は、遊び始めの動作から遊び込むうちに様々な動きに発展していく過程で出現し、どちらの素材でも多数出現していた。

ダンボールでは、「からだに巻く」遊びの場合は、はじめは一人で自分のからだに巻いて歩いたり走ったりして（おそらく車に見立てて）遊んでいたのが、そのうち両端をバタバタさせながら走る（鳥）や、肩にかけ端を持って走る（飛行機）に変化していった。また、他児と連なり、電車ごっこに発展するケースもみられた。「端をもち滑らせて」遊んでいた場合は、他児を乗せて移動する遊び（ソリ遊び）に、「振り回して」遊んでいた場合は、他児がそれを跳び越えたことをきっかけにジャンプ遊びがはじまった。このように、ダンボール遊びでは、他児と関わる遊びに発展するケースが多くみられた。

布では、振ったり、回したりして移動するなど、動きとしては単独の複合動作が多く、他児とかかわった動きは少なかった。ただし、動きとしては単独でありながら、ヒーローごっこ（戦いごっこ）や、お姫様ごっこなど、数名でイメージを共有して遊ぶことはできており、ここに5歳児としての遊びの発達の特徴が表れていた。

また、布遊びではダンボールに比べて、布を扱いながら「走る」動作が多く出現し、ダイナミックな遊びに発展していくケースが多かった。このことは、軽量で扱いやすい布という素材の特徴と考えられた。

出現した遊びを動作カテゴリー別に整理することで、素材と出現する動きに関係があることがわかった。これらのことから、幼児は素材の特徴を認識し、それに応じたイメージや扱い方で遊んでおり、それが動きとして表出していることが窺えた。

よって、素材によって引き出される動きが変わる、つまり、素材は、遊びによって生み出される動きに影響することが示唆された。

(2) 遊びの様子からみた環境設定としての素材の有用性と保育者の手立て

今回の素材（ダンボール・布）遊びでは、これまでの先行研究同様、30分という時間の間、幼児は絶え間なく遊び続け、からだ全体を使って動いていた。そしてその中で、幼児期に必要な基本的な動作も十分出現していた。田中は、自分の好きな運動遊びを自発的に行う方が、子どもの多様な動作の経験を深め、それが結果として運動能力や質の高い動作の発達に寄与すると報告している¹⁹⁾。このことから、ダンボールや布を使用した自発的な遊びは、からだの操作や動作を促すための有効な運動・身体活動プログラムであり、ダンボールや布を使った遊びは、動きを引き出す有効な環境設定となり得ることが示唆された。

環境を通して行う教育・保育については、平成29年改訂（または改定）された3法令（「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」）においても、幼児教育の中心として示されている。各教育要領・指針では、保育者は「幼児が身近な環境に主体的に関わり、環境との関わり方や意味に気づき、これらを取り込もうとして、試行錯誤したり、考えたりするようになる幼児期の教育における見方・考え方を生かし、幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めるものとする。」（幼稚園教育要領第1章総則第1幼稚園教育の基本）¹⁰⁾ や、「子どもが自発的・意欲的に関わるような環境を構成し、子どもの主体的な活動や子ども相互の関わりを大切にすること。特に、乳幼児にふさわしい体験が得られるように、生活や遊びを通して総合的に保育すること。」（保育所保育指針第1章総則1保育所保育に関する基本原則（3）保育の方法オ）¹¹⁾ などと明記されている。

また、社会情動的スキルや非認知的能力と呼ばれる、忍耐力や自己制御能力、自尊心の獲得においても、環境を通じた教育・保育は重要な役割を果たしている。よりよい環境は、幼児の心情・意欲・態度を育てる。つまり、幼児の主体性や自主性を育てるための方法であり、そうすることで幼児の非認知的能力や社会情動的スキルを育てていくことにもつながる。したがって、幼児教育・保育施設においては、考えられた十分な環境設定（環境構成）が重要となってくる。

幼児の主体性や自主性を育てるよりよい環境とは何か。松井は、子どもの大人にはない発想で環境を利用し、独自に環境を作り出すことに着目し、子どもの視点に立った環境づくりについて述べている。その中で、子どもは豊かな発想力を基に様々な想定外の遊具の使い方をすることで、発想力を軸にした①おもしろさ、②遊びの発展、③物とかかわる経験、④相互作用のきっかけが生じることを示唆している。そして、子ども同士の新たななかかわりも生まれると報告している²⁰⁾。

これら幼児教育・保育における環境の在り方に照らし

合わせてみても、主体的に、意欲的に遊び続けることができていた本研究の素材（ダンボール・布）遊びは、幼児教育・保育の環境設定としての要素を十分に満たすものであったと考えられた。

ただし、本研究では、幼児のみでは生まれぬ遊び（動作）もあることが示唆された。特に「布」では、ダンボールに比べ遊びの種類に偏りがあり、出にくい動作もみられた。先行研究において複数の保育施設でデータを取った際には、別の施設においてバスタオルを使用した「ソリ遊び・綱引き・キャッチボール」など多彩な集団的遊びが出現していた¹⁶⁾。本研究の幼児は、今回はじめて素材遊びにふれたこともあってか、このような集団的遊びにまで発展することはなく、バスタオルはもっぱら敷いて座る・寝ることに使うだけで、上記のような使い方は出てこなかった。その違いは、前者は日常の保育の中でタオルを使った遊びの経験があり、後者ははじめてであったという点である。このことから、幼児の遊びは、日常の遊びを含んだ生活体験の影響が大きいことを物語っており、幼児の自主性・自発性を重んじながらも保育者の何らかの手立ての必要性を暗示させた。

また、それぞれの素材の特徴を活かした環境設定を心がけることは言うまでもなく、保育者が使用する素材を十分に理解し、使い方に精通することも重要である。古屋は、保育者主導の保育実践（設定保育）をとおして、保育現場における運動教材の活用として「布」は、自分のイメージを動きで表現しやすいことや、活動を通じた他者との関わり合い等、多方面にわたることを報告している。そして、「イメージから動きを膨らませる素材」としての「布」の有用性を示唆している²¹⁾。よって、「布ならではの」特徴を活かした素材遊びを日常的に保育に取り入れることによって、幼児の布遊びは広がりをもせるものと考えられる。このことから、幼児の遊び（動き）を広げるためには、保育者の適切な手立ても必要であることが示唆された。

以上より、幼児の豊かで健やかな育ちを促すには、幼児が自主的に・自発的に様々な遊びを繰り返し、遊びの内容が深まるような環境設定の工夫と、保育者の適切な配慮の必要性の示唆をあらためて確認することができた。

まとめ

身近な素材を利用した環境設定の工夫について検討することを目的に、ダンボール遊びと布遊びを実践し、それぞれの出現した動作から検討した。その結果、以下のことが判った。

- 1) 出現する動作は、ダンボール・布ともに出現するものと出現しにくいものがあり、それが素材のもつ特徴であることが示唆された。
- 2) 遊びは、幼児の生活体験に由来するものであり、それによって出現する動作も変わることが推察された。

3) ダンボール・布ともに操作性の動作は、どちらも多彩な動きが出現することが確認され、ダイナミックな動きを誘発しやすいことが判った。

4) 幼児は素材の特徴を認識し、それに応じたイメージや扱い方で遊び、それが動きとして表出していることが窺えた。

以上のことから、ダンボールや布を用いた環境設定は、幼児期に必要な多様な動きを幅広く引き出すことが確認でき、環境設定としての有用性が示唆された。

ただし、幼児の自主性に任せた自由遊びの場合、(特に「布」を使用した遊びにおいて) 幼児だけでは「出にくい動作」もあることが確認され、幼児の自主性・自発性を重んじながらも保育者の適切な手立ての必要性も示唆された。

今後の課題

本研究は、例数も少なく事例の概観に留まったため、妥当性に欠き、結論を導くには限界があった。したがって、今後、例数を増やすとともに、動作の個別性にも視点を置き、様々なケース(遊び方など)を質的、量的に検討していきたい。

脚注

- 1) 基本運動の技能は大きく、「適応の運動技能」と「操作の運動技能」に分けることができる。「適応の運動技能」は、身の回りの環境をそのままの状態を利用して動作のことを指し、その動きの型に基づいて安定性と移動動作に分類される。主に固定道具や大型遊具の遊びによって獲得される。
- 2) 「操作の運動技能」は、手や足(またはからだ全体)で物や人を扱うのに関係する動作で、荷重、脱荷重、捕捉、攻撃的動作に分類される。主に小型遊具を扱う遊びにより獲得される。

参考・引用文献

- 1) 中央教育審議会：子どもの体力向上のための総合的な方策について(中間報告)。文部科学省。(2002-7-18), 2002.
- 2) 中央教育審議会：幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)。文部科学省。(2016-12-21), 2016.
- 3) 日本学術会議、健康・生活科学委員会、健康・スポーツ科学分科会：提言子どもの動きの健全な育成をめざして—基本的動作が危ない—。日本学術会議。2017.
- 4) スポーツ庁：令和元年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果。https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/tokei/kodomo/zencyo/1411922_0001.html, (2019-12-26), 2019.
- 5) 杉原隆、近藤充夫、吉田伊津美、森司朗：1960年代から2000年代に至る幼児の運動能力発達の時代変化。体育の科学。57, 69-73, 2007.
- 6) 中村和彦、武長理栄、川路昌寛、川添公仁、篠原俊明、山本敏之、山縣然太郎、宮丸凱史：観察的評価法による幼児の基本的動作様式の発達。発育発達研究。(51), 1-18, 2011.

- 7) 文部科学省：体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究報告書。2011.
- 8) 幼児期運動指針策定委員会：幼児期運動指針。文部科学省。2012.
- 9) 幼児期運動指針策定委員会：幼児期運動指針ガイドブック 毎日、楽しく体を動かすために。文部科学省。2012.
- 10) 文部科学省：幼稚園教育要領(平成29年告示)。2017.
- 11) 厚生労働省：保育所保育指針(平成29年告示)。2017.
- 12) 内閣府、文部科学省、厚生労働省：幼保連携型認定こども園教育・保育要領(平成29年告示)。2017.
- 13) 瀧信子、矢野咲子、怡土ゆき絵、青木理子、小川鮎子、小松恵理子、高原和子：5歳児にみられたダンボールあそびの実践報告。九州体育・スポーツ学研究。31(1), 68, 2017.
- 14) 瀧信子、矢野咲子、怡土ゆき絵、青木理子、小川鮎子、小松恵理子、高原和子：5歳児の多様な運動経験に繋がる自発的なダンボール遊びの有用性。福岡こども短期大学研究紀要。28, 19-27, 2017.
- 15) 高原和子、瀧信子、矢野咲子、小川鮎子、小松恵理子：幼児の自発的なダンボール遊びにおける動きの内容。福岡女学院大学大学院紀要 発達教育学。6, 33-45, 2018.
- 16) 瀧信子、高原和子、宮嶋郁恵、矢野咲子：5歳児にみられた布遊び。九州体育・スポーツ学会第68回大会。2019.
- 17) 石河利寛、栗本閔夫、勝部篤美、近藤充夫、前川峯雄、松田岩男、森下はるみ、清水達雄、末利博、高田典衛：幼稚園における体育カリキュラムの作成に関する研究 I。カリキュラムの基本的な考え方と予備的調査の結果について。体育科学。8, 150-155, 1980.
- 18) 財団法人体育科学センター：幼児の体育カリキュラム。株式会社学習研究社(学研)、東京、20-23, 1986.
- 19) 田中沙織：幼児の運動能力と基本的運動動作に関する研究—自由遊びに見る運動能力別の基本的運動動作比較の試み—。幼年教育研究年報。31, 83-88, 2009.
- 20) 松井愛奈：保育環境における想定外の使い方と遊びの発展—2歳児から4歳児までの3年間の縦断的検討—。保育学研究。55(2), 168-176, 2017.
- 21) 古屋朝映子：保育現場における用具を活用した運動教材の一例—布を用いた運動—。川村学園女子大学研究紀要。29(2), 129-135, 2018.

付記

本論文は、「使用した素材の違いからみた幼児の遊びの展開—ダンボール遊びと布遊びを比較して—」として九州体育スポーツ学会第68回大会でポスター発表したものを加筆・修正したものである。